

## 共同研究 「ジャクソニアン・デモクラシーの 史学史的検討——一九六三年まで」

富 田 虎 男

はじめに

これは、十年前に清水研究室に集まった大学院学生・聴講生を主なメンバーとする共同研究「ジャクソニアン・デモクラシーの研究」の成果の概括である。いまここに十年前の研究成果を報告するのは、もとより当然より早い時期に報告すべきつとめを忘れた報告者富田の怠慢によるものであるが、ひとつには、同じテーマの下にここ一年余り共同研究をつづけて来て、いまその成果の一部を報告する新メンバーによる研究のひとつの共通の出発点を築くため、いわば遺産の継承という作業の一環として貢献したいと思うからである。またひとつには、その後のわが国において、この種の作業をまとめたものが報告されていない事情にもよる。なお、現在における反省をも加えたこの概括について一切の責任は筆者にある。ただし、後述するように、三つ

共同研究(富田)

の研究紹介は、それぞれの分担者が当時まとめたものを、わずかな技術的修正を加えただけで、そのまま掲載する。

一九六二年当時のメンバーの大半は、その前年におこなった共同研究「アメリカ独立革命の研究」の参加者でありその成果は本誌『史苑』第二十三巻第一号に「独立革命史の史学史的再検討」という題で報告されている。そのなかで、つぎの共同研究の課題として「ジャクソニアン・デモクラシーの研究」をとりあげることが述べられている。それは、つぎのような素朴な問題関心にもとづいていた。

アメリカ独立革命史の研究が、主として植民地時代とのつながりにおいて、いわば原因論の視角からおこなわれてきたが、独立後の時代とつなげて、その意義が問われなければならぬのではないか。具体的には、アメリカ独立革命とジャクソニアン・デモクラシーはどうつながるのか。ジャクソニアン・デモクラシーと呼ばれる時代は、どのよ

うな歴史的性格をもった時代なのか。それはまた、南北戦争とどうつながっていく時代なのか。

このような共通の疑問から、この共同研究は出発した。そして、さし当り、アメリカおよび日本におけるジャクソン・デモクラシーの研究史の整理が目指された。本稿は、そのまとめである。この共同研究の参加者はつぎの通りである。清水博、阿部澄子、大原祐子、笠野玲子、篠田(市橋)靖子、富田虎男、西川進、宮下(増子)順子、山田(田村)和子、渡辺(佐島)静子である。なお、この共同研究と併行して、別に清水博を代表とする科研費による総合研究「近代市民社会意識形成期の研究—アメリカを中心として—」が、ジャクソン期研究を主要なテーマとしてすすめられていた。その研究成果の一部は同研究会『研究会報』(一九六三年三月)としてまとめられている。それは、この共同研究を補うものとして、のちにしばしば言及するであろう。

ほぼつぎの順序でこの共同研究はすすめられた。本稿もこの順序にしたがつて述べていくことにしたい。

一、シュレジンガー・ジュニアの『ジャクソンの時代』  
Arthur M. Schlesinger, Jr. *The Age of Jackson*, 1945  
の全員による読み合わせ。

二、シュレジンガー説に対する批判論文の検討。

ととらえ、労働者の役割の決定的重要性を強調している。この著書を全員で読み合わせたのは、ここで提起された労働者階級担い手説がジャクソン期研究史上ひとつの画期となり、これをめぐって批判や新しい仮説が出されているという研究状況による。

## 二、シュレジンガー説に対する

### 批判論文の検討

以下の六項に分けた論文とコメントは、シュレジンガー・ジュニアの『ジャクソンの時代』に対する批判を目的として書かれたものである。これら全員で読み合わせ検討することによって、『ジャクソンの時代』の問題点を一層はつきりつかむことができた。論文名のとおりこの内人名は分担報告者である。

1. Joseph Dorfman, "The Jackson Wage-Earner Thesis," *American Historical Review*, Vol. LX (Jan, 1949)

(渡辺)

この論文でドーフマンは、東部の賃銀労働者の運動が、ジャクソン支持者内の「急進的な反資本家的な分子」によって指導され精気をつぎこまれたとする賃銀労働者説の代表として、シュレジンガー説を批判する。彼は、「急進的」や「ワーキング・メン」の概念を検討し直し、エヴァンズズの

三、わが国におけるジャクソン期研究の整理。  
四、アメリカにおけるジャクソン期研究の検討と史学史的整理。

五、地域別・個別研究の紹介。

## 一、シュレジンガー・ジュニアの

### 『ジャクソンの時代』

シュレジンガー・ジュニアはこの著書で従来のジャクソン・デモクラシー解釈——つまり西部・フロロティアの自営農民を担い手とする、アグレーリアン・デモクラシー論——に挑戦し、東部都市の労働者階級と自由主義的改革者の役割を強調した。彼は、西部対東部というセクショナルな対立図式にかえて、東部とくに北東部における労働者の資本家に対する闘争、彼の補足によれば、ビジネスによる政治支配に対する他の社会部門に非ビジネス諸集団の闘争という「階級的」な図式を提起したのである。その闘争の焦点として、彼は「銀行戦」に着目し、この戦いで基本的に相反する二つのグループ——西部の負債者階級と東部の地方銀行業者、紙幣増発論者と、東部労働者階級、硬貨論者とが、一時提携したが、地方銀行業者がジャクソン派から脱落するにつれて、紙幣増発論者と硬貨論者の二つのグループの矛盾は増大し、両者の差違を大きくした、

定義——「たんに手仕事の労働者をふくむだけでなく、精神的であれ、肉体的であれ、骨を折って自分のパンを稼ぐすべての人」をワーキング・メンと呼ぶ——をとり上げ、この定義こそアメリカのデモクラシーと労働運動を理解する上でよい手がかりになるとし、結局、ジャクソンニアン運動が「反資本主義的であるよりむしろ反貴族主義的」な運動であり、「リベラルな運動」つまり特権に対する反抗であったと結論する。そして、のちの資本家・労働者間の階級闘争の概念をジャクソン時代の歴史に読みこんでいると警告している。

シュレジンガーはドーフマンに反論した。"To the Editor of the *American Historical Review*," by A. M. Schlesinger, Jr. *American Historical Review*, Vol. LV, No. 3, (April, 1949) 自分はのちの資本家・労働者の階級闘争をジャクソンの時代に読みこんだのではない。ビジネス社会による支配に対する他の社会の闘争というアメリカ社会独特の闘争をジャクソン期にみたのである。また、「反資本家的」は「資本主義体制に反対する」という意味ではなく、「政府を左右しようとする議論資本家たちに反対する」の意味でつかっているのだ。要するに、ジャクソンニアン・デモクラシーは、セクシオンではなくクラス(階級)の問題とみなされるならば、よりよく理解できる、と

らうのが私の主旨だと反論した。

c. Bray Hammond, "Public Policy and National Bank," *Journal of Economic History*, Vol. VI, (May, 1946) (笠野)

長く連邦準備銀行にあって銀行業務に明るいハモンドはシュレジンガー・ジュニアの『ジャクソンの時代』の重要性とすぐれた点を称賛しつつも、それが善悪二元論に立っている点と、経済問題とくに合衆国銀行の取扱いがまずい点の二つの欠陥を指摘する。また彼は、ジャクソニア・デモクラシーがフロンティアの影響のみならず東部の影響を反映しているという事実をシュレジンガーが強調しているのは適切であるが、東部の影響力を労働者だけに結びつける企業に結びつかなかった点で間違っている、と批判する。さらにハモンドは、ジャクソン運動のなかでビジネスの民主化以上に重要なものはない、それは独占的商業グループないし商業貴族支配にとどめをさした、としつつ、中央銀行としての合衆国銀行のインフレ抑制機能にも注目して、当時それがもっと必要になりはじめたまさにそのときに、中央銀行を破壊するような反対の方向に近づいた人びとの賢明さに疑問を投げかけることができよう、ときびしく指摘している。

e. William A. Sullivan, "Did Labor Support

論を下すことが可能であるように思われるが。

4. Edward Pessen, "Did Labor Support Jackson?," *The Boston Story*, *Political Science Quarterly*, LXIV (June, 1949), Robert T. Bower, Note on "Did Labor Support Jackson?," *The Boston Story*, *Ibid.*, LXXV (Sept., 1950) (大原)

ペッセンは、フィラデルフィア市についてのサリヴァンの研究にひきつづくものとして、ボストンのワーキングメンの役割について地区別の統計的分析をおこない、貧しい地区がデモクラツツを支持していないこと、ジャクソンは新来の移民の票を獲得したこと、彼をもっとも支持したワーキングメンは、農村部諸郡の自営農民であったこと、銀行戦は反独占問題全体の一面にすぎないこと、そしてジャクソニアンは、銀行ベースの拡大、つまり発生期の資本主義の発展にみられる貴族的独占の破壊を求めたにすぎなかったこと、を結論している。結局、ジャクソン自身は、労働者によって投票において支持されなかったし、一八三〇年代の中ごろ、彼の二期目の任期が終るころになって、彼の党が労働者地区でようやく過半数をかちうるようになってきた、とする。

このペッセンの結論に対し、R・T・バウアーは、次の諸点で批判する。ボストンがこの時代全体としてホイッグ

Andrew Jackson?," *Political Science Quarterly*, Vol. LXII (Sept., 1947) (山田)

サリヴァンは、フィラデルフィア市の労働者と政治の関係に焦点を合わせ、一八二八年の大統領選挙においてジャクソンの大勝を可能にした力はなにか、という古くて新しい問題、また「銀行戦中に、労働者はしだいにジャクソンを自分たちの指導者とみなしはじめ、彼の党を自分たちの党とみなしはじめた」とするシュレジンガー説に取組んだ。サリヴァンは、同市の労働者が、地方・州・連邦下院の議員選挙を通じて、どの程度デモクラット党に同盟したか、を二つの面から検討する。ひとつは、ワーキングメメン党がジャクソン派候補を他の候補以上に支持したかどうか、であり、もうひとつは、労働者地区がジャクソンに投票したことを史料で十分に示すことができるかどうか、という問題である。彼の解答はこうである。第一の問題については、同市のワーキングメメン党は、デモクラットが勝利した場合にはほとんど貢献しなかったが、敗北した場合には貢献した。しかもまもなく一八三一年に急速に衰退した。第二の問題については、同市の各地区の総資産、人口、一人当りの資産査定額と地区毎の投票結果とを統計的に分析した結果、労働者は一貫してジャクソン反対派を支持したと結論している。もっとも、彼が作成した統計表から別の推

支持、反ジャクソンの都市であったこと。また、ペッセンの表から、個人の課税査定額とデモクラツツ支持票のパーセンテージとの相関係数を出してみると、〇・七三という係数がでるが、これはデモクラツツ支持票と諸地区の社会的性格との間にはっきりした関係があることを示していること。また労働者地区が大統領選でも知事選挙でも地方選挙でもデモクラツツ支持の傾向を示していること。要するにバウアーは、同じボストンで、ジャクソンと彼の派は労働者階級から支持をうけていた、と逆の結論をみちびき出している。

5. Robert B. Morris, "Andrew Jackson, Strike-Breaker," *American Historical Review*, LV (Oct., 1949) (富田)

モリスは、この論文で、チェサピーク・アンド・オハイオ運河工事会社におけるアイルランド人建設労働者のストライキに際し、連邦軍を派遣し鎮圧したジャクソンの態度を検討した。その結果もっとも控え目についても、ジャクソンは労働と資本の争いに中立であり、連邦の介入が求められた場合には、彼は資本が労働を抑圧するのを助けるために、つまり労働者の紀律を維持するためブラックリストや私的警官や労働スパイをためらうことなく使うような会社を支持するために、大統領の権限を行使したと結論する。

かくてジャクソンの時代は、「かち誇るリベラリズム」の時代であるよりはむしろはるかに「かち誇る搾取の時代」であったという意見に同調している。

9. Edward Pessen, "The Workingmen's Movement of the Jacksonian Era," *The Mississippi Valley Historical Review* XLIII (Dec., 1956) (宮上)

このペッセンの論文は、シュレジンガーの『ジャクソンの時代』が刊行されてから十年間の、ペッセン自身のをふくめた諸批判を総括したものである。彼はまず、一八二〇年代・三〇年代のフィラデルフィア、ニューヨーク、ニューイングランドの三地区の労働運動を概括して、それがあらゆる面をふくむ社会的プログラムをもった、さまざまな組織からなるものであったとする。つぎに彼は、労働運動とその指導者のイデオロギーを検討した結果、彼らが一致して階級闘争を仮定した社会的プログラムをもち、社会が一握りの富める資本家によって支配されているとみなし、私有財産の悪を攻撃し、社会主義的な線にそった根本的変革の必要を強調していたとする。さらにこのような労働運動と広いジャクソニアン政治連合との関係を検討し、労働運動が一定限度、貴族の特権と独占に反対したし、またそれが広い意味での「ジャクソニアン革命」の一部を構成していたとみられるが、しかし、組織労働運動も未組織のワ

ーキングメンも民主党の固定的部分にはならなかった、と結論している。

以上、シュレジンガー・ジュニアの『ジャクソンの時代』をめぐる諸批判と論争をたどってきて、つぎの点が指摘できようと思われる。

第一に、これらの論争は、ジャクソニアン・デモクラシーを担ったのはだれか、という担い手・階級の問題としていわばシュレジンガーがしつらえた土俵の上でおこなわれてきた、ということが出来る。その結果、ペッセンが概括しているように、ジャクソニアン・デモクラシーは「労働者階級」だけではなく、さまざまな階級がさまざまな社会的プログラムをかかげておこなった運動であって、労働者階級はその一翼をになつたにすぎない、と労働者の役割が相対化された。

第二に、これと関連して、ジャクソン支持層のひとつとして東部の自営農民層の役割が強調されているが、一方ジャクソンの反労働者の態度も指摘され、すでにこの論争のなかに、やがて一九五〇年代に有力になる、新興資本家階級こそがジャクソニアン・デモクラシーの主導的部分であるとす企業家説や、上昇の機会を未来にみながら過去に理想を求めるジャクソニアンズの「逆説的」解釈が、芽生えているのを見ることが出来る。

るので、ここでは省略する。

これらの諸解釈のうち、この共同研究において検討の対象とされたのは、農本主義的・地域的解釈として、ターナー説、ビアード説、階級的解釈としてシュレジンガーの労働者説のほか、ハモンドと、ホーフスタッターの「企業家」担い手説、そして逆説的解釈として、L・ハーツ、M・メイヤーズ、W・ウオードらの説であった。

まず農本主義的・地域的解釈はターナーのつぎの著作— F. J. Turner, *The Frontier in American History*, Chapters, I, V, X, XIX, and *The United States, 1830-1850*, Chapter II—のなかにもっともはっきりとあらわれている。たしかに、ここでターナーは、西部・フロンティアのアメリカ・デモクラシーへの貢献、特殊的にはジャクソニアン・デモクラシーへの貢献を強調しすぎ、他の諸要因を捨象しすぎているが、それは彼以前に不当に軽視されていた西部・フロンティアの役割の、東部偏重に対するバランス回復のための過度の強調と捨象として評価されるべき面も多分にもっているようである。このことは逆に、西部・フロンティア偏重に対するシュレジンガーの東部労働者の役割の過度の強調と捨象についてもあてはまる、と思われる。

他方、ビアードの場合、農本主義的・地域的解釈派のな

### 三、わが国におけるジャクソン期 研究史の整理

この課題は、富田が分担したが、これについては、その後現在までの研究成果をもふくめて、別稿を予定している。

#### 四、アメリカにおけるジャクソニアン・デモクラシー研究の史学史的整理

この課題に取り組む上でまず格好な論文として、セラーズ・ジュニアの「アンドルー・ジャクソン対歴史家」Charles G. Sellers, Jr., "Andrew Jackson versus the Historians," *The Mississippi Valley Historical Review*, XLIV (March, 1958) の読み合わせがおこなわれた。セラーズはジャクソニアン・デモクラシーの諸解釈を四つの段階に区分している。第一がホイッグ的解釈、第二が農本主義的・地域的解釈、第三が階級的解釈、第四が逆説的解釈である。この論文の内容と問題点については富田虎男「ウォルター・ヒュージンスとジャクソニアン・デモクラシーと Working Class」(一九六〇)をめぐって(近代市民社会意識形成期研究会『研究会報』第一号一九六三年)にまとめられている。

かに彼を押しこめるのは不当であるように思われる。といふのは、彼が描いた図式は、「大都市の新聞、牧師、製造業者、銀行家、南部の大プランター」の連合勢力対「農民とくに貧困な負債者農民とタウンの職工」の同盟勢力、といふものであり、むしろ階級的対立の図式だからである。

(Charles A. and Mary. R. Beard, *The Rise of American Civilization*, 1927, pp. 551-552.) の点からいえば、シュレジンガー・ジュニアの労働者担い手説は、その華麗な説得的な文章によって、すでにビアードによって定式化されていた労・農同盟説のうちの労働者の役割を一面的に強調したものと見ることができよう。

他方、同じ「階級的」解釈に分類されたいわゆる「企業家」担い手説は、ビアードやシュレジンガーが敵対陣営に見出した企業家層・資本家層こそ、ジャクソニアン・デモクラシーの担い手であった、とするものである。たとえばホーフスタッターは『アメリカの政治的伝統』Richard Holsinger, *The American Political Tradition and the Men Who Made It*, p. 73 のような論旨を展開している。一八二八年の彼の当選は、西部の東部にたいする興起でもなければ、辺境の勝利でもなかった。彼が人民の委任をうけたといわれうるとするならば、それは人民の定かならぬ欲求や熱望に表現を与えてやったということだ。その欲

ンガーが「労働者」と名づけた人びとに、プランター・農民を加えて「小資本家」興起しつつある中産階級」という名をつけかえた点である。一方、シュレジンガーが「資本家」と呼んだ人びとを、彼は「実業界のエリートとその同盟者」と呼びかえている。

また、ハモンドも、ジャクソニアン・デモクラシーの第一の課題として、ビジネスの民主化、ビジネスの機会からの除外に反対する新企業家のたたかい、をあげている。Bray Hammond, "Public Policy and National Bank", 前出 "Jackson, Biddle and the Bank of the United States,"

*Journal of Economic History*, VII (May, 1947). 彼は *Revolution to the Civil War*, 1957. のなかで詳しく展開し、独立戦争から南北戦争にいたる期間の基本的政治論争の多くは、アメリカ文化の支配をめぐる、農民と企業家の争いに起因しているとし、ジャクソニアン運動を「農民(=アングレリアンズ)に対する、新企業家・ビジネス企業の政治的文化的力の勝利とみている。彼のいう新企業家もシュレジンガーのいう「労働者」やホーフスタッターのいう「小資本家」と重なり合う部分を多くもっているように思われるが、農民を対抗勢力とした点で、後者とは異なっている。こうして、ホーフスタッターとハモンドは、ジャ

求とはなにか。それは拡大しつつある機会と、これらの機会を、もろもろの制限や特権を除去することによってさらに拡大しようとする欲求である。それは、小資本家のもろもろの野心と密接にからみあっていた。小製造業者や熟練職人 mechanics の胸中にはもっと繁栄し伸びたいという希望が激しく息づいていた。典型的なアメリカ人とは、希望にみちた資本家であり、刻苦精励の野心家であり、彼にとって実業は一種の宗教であった。彼は、自分自身の店を開きたいと熱望している職人の親方であり、土地投機をしているプランターや農民であり、裁判官になりたいと願っている弁護士であり、連邦議会議員になりたいと願っている地方政治家であり、大商人になりたいと願っている小売店主のようなものであった。いいかえれば「興起しつつある中産階級」であった。このような願いを達成する機会を人為的に閉鎖しているとみなされたもの——すなわち特許会社の「独占」とりわけ「合衆国銀行」——こそ、彼らの不満の因であり、挑戦の対象にほかならなかった。

かくして、ホーフスタッターは、ジャクソニアン運動の歴史的意義をニューディールと同じように、「社会の大部分の人々の実業界のエリートおよびその同盟者に対する闘争」ととらえている。この意義づけは、シュレジンガー・ジュニアのそれと全く同じである。ただ違いは、シュレジ

クソン期を「解放された資本主義の発展における一段階」ないし「ビジネスの民主化」の時代とする観点から、小資本家・新企業家をジャクソニアン・デモクラシーの担い手ととらえ、それを政治的民主化の時代とする観点から、「労働者」をその担い手ととらえるシュレジンガー説に厳しい批判を下しているのであるが、実際には、農民を除き、同じ人間を別の角度からみて別の名をつけたのではないか、という感をまぬがれない。そして、この「企業家」説から逆説的解釈と分類されるハーツやメイヤーズの解釈へは、ほんの一またぎにすぎないのである。

ルイス・ハーツによれば、封建制をもたなかったアメリカは、ヨーロッパのような貴族、貧農、プロレタリアートがない社会であり、そこでは発生期の工業労働者をふくめて、だれもが独立の企業家としての心構えをもっている。それは「国民大衆が知らず知らずのうちに資本主義的になり、資本主義はその広範な流布にともない民主的にならざるをえない」社会であり、「われわれはみな同じ階級——平民」なのだ。そこには、ホイッグ主義者にとって、闘うべき貴族、同盟すべき貴族も、非難すべき暴民もない。にもかかわらず彼らはこの「自由社会」の事実を眼を閉かす愚かしくも社会的敵対者でなく本来手をさしのべて同盟を結ぶべきデモクラツと敵対した。彼ら富裕な中産階級は

不幸にして中間に位置せず、頂上に立っていたがゆえに「貴族階級」として非難され、「反動」として呪われた。ハミルトンに代表されるホイッグ的資本主義は民主主義をおそれた。それゆえ、ジャクソンに象徴される民主主義は、前者を打破しうる立場に立ちえた」というのである。(Louis Hartz, *The Liberal Tradition in America*, 1955; Chapters, IV, V. ルイス・ハーツ、有賀貞・松平光史訳『アメリカ自由主義の伝統』有信堂、一九六三年)

このようなハーツの見解は、この時代のペンシルヴェニア州の経済政策についての彼の実証的研究 Louis Hartz, *Economic Policy and Democratic Thought, Pennsylvania, 1776-1860*, 1948. のなかに、すでにその原型を見出すことができる。この内容については地域的研究のところで紹介するが、要するに彼は、民主党もホイッグ党も同じ職業の人がほぼ平等に分布していたと分析して、前者が貧者を、後者が金持を、代表していたという革新主義史学の解釈を全面的にしりぞけているのである。

メイヤーズもまた、ジャクソン党とホイッグ党がおおまかにいって類似の階級構成をもつとする。そしてジャクソンの政治の本質的な意味は、法的・制度的な変革の客観的な重要性のなかに見出されるとし、とくに「怪物銀行」に対する戦いを、ジャクソニアン・デモクラシーの特別な使

る一つの伝説を生むきっかけができたのである。

激しいナショナリズムのこの時期にあつて、合衆国の人びとはほとんどすべての過去のでき事の中に神の特別な加護を見いだそうとする傾向にあつた。自分達が古代のユダヤ民族と同様に選ばれた民であるとの自認と、神がアメリカの成功を取りはかるうに違いないとする彼等の強烈なオプティミズムとは、ジャクソンを「A Man of Nature」として讚美することの中にみられる反主知主義的傾向を正当化するものである。ニューオーリンズ戦の勝利を合衆国に対する神の恩寵とみることによつて、アメリカ人民は清教徒たちによつてもたらされ、育てられていた伝統的な考え方―神によつて新大陸に移植されるべく旧大陸からもたらされた、選ばれた種であるというピューリタンの考え方を発展させていたのである。そして後年、ジャクソンが重要な役割を果たした情況のもとで、このピューリタンの伝統はいわゆる「マニフェスト・デステイニ」の名をとるようになるのである。

結局、ニューオーリンズ戦の勝利にまつわる種々の伝説の中でアメリカのナショナリズムに最も合致したものは、神の意志がその使徒であるジャクソンの中にみられるとする説である。これは、自然の中に神の意志を見出すことがとりわけアメリカの環境に適していたのであり、神の特別

命であつたとみている。さらにメイヤーズは、ジャクソニアンの逆説を指摘する。すなわち、ジャクソニアンの運動はアメリカにおける自由放任主義とその文化への道を掃き清めるのに手を貸したにもかかわらず、彼らはその政治的良心のなかにすでに過ぎ去つた純潔な共和的秩序の理想を抱いていた」という事実がそれである。メイヤーズは当時の二人の作家トックヴィルとクーパーと「三人の異なった見解をもつ代表的なジャクソニアンの信条の分析によつて、さらにニューヨーク州のケース・スタディを通じてこの点を詳しく論証している。Marvin Meyers, *The Jacksonian Persuasion; Politics and Belief*, 1957.

一方、ウオードの『アンドルー・ジャクソン―一時代のシンボル』John William Ward, *Andrew Jackson; Symbol for an Age*, 1955. の内容については、渡辺と笠野が当時まとめたものがあるので、それをここに掲載する。

ニューオーリンズの戦いに於けるアメリカ軍の勝利はあまりにも圧倒的であり、一般的な理性では殆んど説明で困難いような状況にあつたため、人々はその勝利が、合衆国に対する神の特別な加護によつてもたらされたものであると信じた。ジャクソン将軍に対する人々の讚美と感謝の念は、ジャクソンを彼等のもとに遣わした神に対する讚美となり、ここにジャクソン将軍を神との関連においてながめ

な加護は、アメリカが持っているユニークで有利な自然条件によつて証拠だてることができたのである。神と自然とはアメリカ人民の心の中に融合され、彼等は新世界の地形構成の中に神によつて意図された彼等の運命を見たのである。

十九世紀を通じて「マニフェスト・デステイニ」の概念はアメリカの膨張の原理となつたが、この原理が合衆国に対する神の恩寵という信念に基づいている限り、ジャクソンは、膨張という歴史的動勢の中で役者としての意味を持つていたばかりではなく、膨張を必要にしてかつ正当なものであるとみなす基礎理念を象徴したのである。アメリカがその豊かな自然条件を基盤にして、自由の領土を拡大するよう神から運命づけられていると信ずるとき、民主主義と膨張という二つの矛盾した考えが結びつき、この二つを結びつける接合点にアンドルー・ジャクソンがいたのである。神と自然とはアメリカのユニークな運命を支配し両者はジャクソンの中に象徴化されていたのである。

ニューオーリンズの勝利の原因を自然あるいは神に求めたとき、ジャクソン自身は第二義的な役割しか演じていなかった。しかし、ここに、アメリカの勝利に関する第三の解釈として、勝利の原因を、自然の恩恵によるものでも、神の摂理によるものでもなく、ジャクソン自身の中に求め

ようとするものがある。この戦いでジャクソンを勝利に導いたものは、絶対に勝たなければならないというジャクソンの鉄の意志であった。このようなジャクソンの確固たる意志に対する讚美は、彼の多くの性格描写の中心をなす。

一八一五年の勝利から一八四五年の死に至るまで、ジャクソンは鉄の意志を持った人に見与えられる成功の権化として、常にアメリカ人の想像力の中に存在していた。

人間は誰でも自分自身の運命の主人公であるという考えは、アメリカの過去の社会に深く根を下していたものであり、この考えの根底にあるものは人間の意志の力に対する信頼である。ジャクソンが早くから両親に死別し、逆境に耐えて身を起したという事実は、アメリカが理想とした「叩き上げた男」の觀念に実質を与えることとなったのである。

ある社会が目ざす目標を抽象的な言葉で要約することは説得力に欠けているため、その社会は具体的なシンボルを作りだそうとするものである。一般的に受け入れられたジャクソンのイメージの果す役割の一つは、意志の力という抽象概念に実質を与えることであつた。一九世紀の前半に、人間は環境の産物ではなく、自分自身の運命の主人公であるという觀念をジャクソンが具体化したのである。そして「叩き上げた男」は、ジャクソン自身が例を示すこと

ウォードは、そのシンボルが、テネシー出身のジャクソン自身によって作りだされたものでも、デモクラット党によって作りだされたものでもなく、時代が必然的に生み出したものであつたと結んでいる。結局この一点にウォードの主眼がおかれてるように思われる。

つぎに、リー・ベンソンは『ジャクソニア・デモクラシーの概念』Lee Benson, *The Concept of Jacksonian Democracy*, 1961. のなかで、アメリカ政治における争いが、つねにビジネス・コミュニティと社会の他の部門との対立であつた、とするシュレジンガーのシエーマを批判し、それはヴァン・ビューレンの党派的修辭にすぎないのに、歴史家のなかにはこれを天来の真理としているものがある、と非難している。ベンソンはニューヨークをテストケースとして、社会階級と政党支持の関係を分析し、投票が厳密に階級の線にそつていたとは考えられぬとし、投票には宗教的・民族的要因など多くの要因が作用していることを明らかにした。ベンソンの研究の内容については、本間長世の「ニューヨーク州におけるジャクソニア・デモクラシー」(近代市民社会意識形成期研究会『研究会報』一九六三年三月)に紹介されているので、ここでは省略する。

以上、ハーツ、メイヤーズ、ウォード、ベンソンの解釈

によつて、誰でも自己の努力次第で高い地位を築きあげることができるといふアメリカの理想像となつたのである。

このように自然、神の摂理、意志、の三つの概念は、理想像としてのアンドルー・ジャクソンを作りあげる際の概念構成の骨組となつている。そしてこれら三つの概念から次の二つの結論がひきだされる。一つは、それらが劇的統一性を持つていること、つまり、時代の英雄であるジャクソンという一人の人物を通じて、三つの概念が現実化されるということである。ウォードがここで強調しようとしていることは、象徴としてのジャクソンは彼の時代の産物であつたのであり、ジャクソンを通じてこの時代の主導的な考えが反映されているということである。又、他の一つは、劇的統一性に加えて更に、論理的・一貫性を持つているということであり、ウォードは、三つの概念が根本的に密接な関係にあり、これら三つが混合してジャクソンのシンボルを作りあげていると述べている。

この領土拡張の時代において、自然、神の摂理、意志の三つの概念は、激しく行動的な社会哲学を是認し、個人の自由が阻止されることのない発展に基礎をおいていた。この三つの概念の力強い感情と心理的な拘束力はジャクソンのイメージの中に集約され、その結果として出来上つたものが、象徴的人物アンドルー・ジャクソンである。最後に

に共通する特徴は、当時のアメリカ社会における階級的対立の相対的欠如の指摘である。その理由として、封建制の欠如、比較的ルーズな階級構成、中産階級の広範な存在、社会的流動性、民族的宗教的構成の複雑さなどの条件があげられる。彼らは、これまでの西部農民説や東部労働者説や、新企業家説のように単独の社会階級がジャクソニア・デモクラシーを担つたとは考えず、諸階級の間の適切な関係のなかに、ジャクソニア運動の理解の鍵を見出すとしてゐる。ハーツは、無階級的「自由社会」(と彼がみる)の現実に「眼を開かなかつた」ホイッグ主義者の「愚かしさ」を不遜にも指摘し、メイヤーズは資本主義的發展にのつて上昇する機会を未来にみながら、過去の農業共和国に理想を求める「逆説的」な存在としてジャクソニアを描き出す。

このような「逆説的」なジャクソニアの姿こそ、現実に立ち向うべき課題を見うしなつた一九五〇年代のアメリカ人の自己像の投影にほかならなかつたのではないか。あたかも、西部農民説や労働者説が、一九世紀末から二〇世紀前半の現実の課題に立ち向う自己の姿に似せてジャクソニアを描きだしたように。実際、一九五〇年代のアメリカ社会の「貧困」に「愚かしくも」眼を開かず(一九五〇年代末にいたつてようやく「貧困」を「発見」した)、

また巨大な「独占」資本にも眼を開かず、したがってジャクソン期に下降した人びとや特権的「独占」を固守する人びとの存在に「眼を開かなかつた」のは、そして、「高度消費社会」へと上昇するとみえた「中産階級」の自己像になぞらえてジャクソンニアンズを描いたのは、彼ら自身の方ではなかつたか。

### 五、地域別・個別研究の紹介

ジャクソンニアン・デモクラシーの政略上の要衝ニューヨーク州については本間長世が、また、ニューヨーク市の「ワーキング・クラス」については、富田虎男が、さらに当時フロンティアの特性を多分にとどめていたフロリダについては、井出義光が、それぞれ前記の近代市民社会意識形成期研究会『研究会報』に論文を書いているので、ここでは省略する。(本間長世「ニューヨーク州におけるジャクソンニアン・デモクラシー」、富田虎男「ウォルター・ヒュージンス」、『ジャクソンニアン・デモクラシーと Working Class』一九六〇をめぐって)、井出義光「フロリダにおけるジャクソンニアン・デモクラシー」)

このほか、ミシシッピ州についてのマイルズの研究 Edwin A. Miles, *Jacksonian Democracy in Mississippi*,

をもって貫ぬかれている。ハーツによれば、この自由放任説は全面的には正しくない。この理由として次の二点が挙げられる。その一つはアメリカ独立革命の伝統に関する解釈についてである。アメリカ独立革命が「権利章典」、選挙権の拡張、航海条例に対する反撃、をともなつたからといって、革命が思想上の無政府主義に傾く傾向よりも、自由放任思想を導き出す上で力があつたと結論づけることはできない。その第二は、アメリカの連邦主義についての誤つた解釈にある。少くとも一八九〇年までは、連邦政府が経済問題に介入しなかつたという事は、まぎれもない事実であるが、だからといって州もまた経済問題に全く介入しなかつたとか、連邦政府の非干渉を唱えた者が、州政府の経済活動への介入にも反対したと考えるのは誤りである。

こうした前提に立つてハーツは、一七七六年から一八六〇年にいたる時期に、ペンシルヴェニアの州政府がいかに州の経済発展に貢献してきたかを追求している。この研究の多くの部分が、経済問題に関する立法および行政の特許、持株会社、公共事業、その他の経済活動に対する規制——の歴史的叙述にさかれているが、力点はこのような経済政策の実施を可能ならしめた「世論の風潮」を追求することにあり。具体的にいえば、民主主義下における州政府の活動を規制する「国民の意志」の存在と、その「国民の意

1960. テネシーに於けるマーティの論文 Powell Moore, 'The Revolt Against Jackson in Tennessee, 1835-1836,' *Journal of Southern History* (August, 1936), 2  
セラーズ・シュニアの論文 Charles G. Sellers, Jr., 'Banking and Politics in Jackson's Tennessee, 1817-1827,' *The Mississippi Valley Historical Review*, XL I (June, 1954),  
メリーランドに於けるハラーの研究 Mark H. Huller, *The Rise of Jackson Party in Maryland, 1820-1829*, 1962, の州別研究が、それぞれ宮下、西川、清水によって紹介されたが、その内容についてここに報告する準備がなく。

他方、ペンシルヴェニアについては、前述したハーツの研究と、サリヴァンの工業労働者の研究とを、篠田靖子が当時まとめているので、以下にそれを掲げる。

まず、ハーヴァード大学教授ルイス・ハーツによる『経済政策と民主主義思想——一七七六年から一八六〇年のペンシルヴェニア』 Louis Hartz, *Economic Policy and Democratic Thought: Pennsylvania, 1776-1860*. Cambridge, Harvard University Press, 1948. は、アメリカ史の上で、アメリカ独立革命から南北戦争にいたる間を「自由放任」の時代として描びてきた従来の定説に対する反論にとりまとめてみよう。

志」を逆に利用せんとする州政府の働きかけとの相互依存関係を研究するにある。

三五〇頁に余るこの研究を、限られた紙数で十分に紹介することができないので、時期をジャクソン時代のみ限り、ハーツがこの時代をどうとらえているかについて簡単にとりまとめてみよう。

先づ最初に、一七七六一一八六〇年にいたるペンシルヴェニア州議会の政党構成について簡単に紹介しよう。独立革命後ペンシルヴェニアも他の州と同じように暫くフェデラリストの時代が続いた。しかしフェデラリスト党の失墜とともに、リパブリカン党が事実上、唯一の政党として残り、ジャクソンが第二合衆国銀行の攻撃を始めた一八三五年までは、民主党による一党独裁の時代がつづいた。しかし三六六年から民主党の競争相手としてホイッグ党と反メイソン党とが出現し、三七年には後の二者の連立が成立し、久しぶりに民主党が政権の座をおわれた。しかし二年後の三九年には再び民主党が勢力を挽回し、その後も南北戦争にいたるまでの間、わずか二年の例外を除いて、民主党が常に議會を牛耳っていた。

しかし、リパブリカン党による一党独裁といつても、その政党自体にはつきりとした主義なり政策があるのでなく、以下のところでも明らかのように、曖昧模糊たる最大



公約数の上に党がのつていたのである。一八二〇年に一ペンシルヴェニア人が「私が諸党という時には、リパブリカン党内部の分派を意味している」(二一頁)と語っているのは、こうした事情を示している。

何故、ペンシルヴェニアには強力な政党または「諸党」が存在しなかったのか。その理由の一つは、経済利害にもとづく強いセクショナリズムの対立が当時のペンシルヴェニアを支配し、更に文化的、民族的相違がセクションの対立を一層つよめてきたことである。第二には、一八三七年から三八年にかけての憲法会議において、知事の任命権を制限する法案が通過した事実が示しているように、党の指導者の間には、一人の行政官——知事——に強大な権力が集中するのを恐れる気風がつよく、党の中心的人物としての知事の指導力が十分に發揮されえない環境にあった。第三には、ペンシルヴェニア州全体として連邦の主要な政策に関するつよい見解の対立が存在しなかったことである。たとえば、関税については保護関税支持が圧倒的につよく、第二合衆国銀行に関しても、少くとも一八三三年までは、すでにそれ以前から他の州では激しい議論がたたかわされていたにもかかわらず、ペンシルヴェニアは合衆国銀行の「要塞」だと考えられてきた。ペンシルヴェニアの州都フィラデルフィアに合衆国銀行があったという事実がペンシ

ルヴェニア人に一種の誇りを与え、それに対する好意的感情を育ててきたからである。

次に、何故民主党が一八三三年以前および一八三九年以後の殆んどの時期を通じて、ペンシルヴェニアにおいて唯一の政党であったか、という疑問について考えてみよう。

まず第一に、ウイリソンやモリスの後に有力な保守派の指導者があらわれなかったことが、民主党の一党独裁を可能にした重要な理由であったと考えられる。しかし一八三三年、ジャクソンの銀行攻撃によってあらわれたホイッグ党や反メイソン党が、長期的に政権の座につくことを不可能にした理由は何であったか。それにはペンシルヴェニアが他の東部諸州に先がけて、一七九〇年以後事実上の普通選挙を実施してきたことに注目しなければならない。このことはペンシルヴェニアの政治が最初から大衆の基盤の上に立つてきたことを意味する。そのために、「平等」というスローガンが神秘的な力をもって大衆を把握し、これに対し「貴族的」という言葉が悪魔の代名詞と考えられる風潮にあった。民主党は各選挙ごとに具体的な政策をもつてたかかったのでも、また単一の経済利害を代表する政党でもなかった。しかもその政策の曖昧さがかえって「平等」というスローガンの下で多くの大衆をつかむことを可能にしてきたのである。他方、ホイッグ党が成功をおさめな

かったのは、具体的な政策に関する理由からではなくて、ただホイッグ党が漠然と「貴族的」という評判を伝統的に背おつていたためであった。ジャクソンの時代は、ジャクソンという個人が経済的セクション、人種、宗教などの対立を越えた「人民の意志」の一つのシンボルとしてかつぎ上げられた時代であった。しかし、こうしてつくりあげられた一種の神話と、本質的には多元的利益の多面的調整によって行われる現実の政治との間にギャップが生じ、「人民の意志」というスローガンが真の人民の意志とは逆の方向に作用する可能性さえもつていた。このことからハーツは多くの歴史家が民主党を貧者の代表、その反対党を金持の代表とみなしているのに対し、一八三七年のペンシルヴェニア憲法会議のメンバーの職業分析の結果から、いずれの党にも各職業の人がほぼ平等に分布していたことは、むしろ当然であるとのべている。

最後にハーツがこの時代の労働者の問題をどう取扱っているかをとりあげよう。少くともジャクソン時代末まではペンシルヴェニアの資本主義は、工場制というよりも商業資本の段階にあった。従って労働運動の中心は工場労働者ではなく、単なる職人の組合にすぎなかった。しかし何故に当時の労働立法が、まだ当時微力であった工業労働者の教育に力を注いだのであろうか。それは民主党を「人民の

意志」の代弁者としてうりこむ一つ的手段として教育問題をとりあげることが有利であったばかりでなく、職人、工業労働者をもふくめたアメリカ中産階級のいかなる側からも反対をうける危険のない教育問題をとりあげることが、雑多な利害の最大公約数としての民主党の立場を強化すると考えられたからであった。一方、このことはアメリカの労働運動がからとられるものとしてではなく、与えられるものとしての性格を伝統的にもつて示していることを示している。

つきに、ウイリアム・A・サリヴァンによる『ペンシルヴェニアにおける工業労働者、一八〇〇—一八四〇年』William A. Sullivan, *The Industrial Worker in Pennsylvania, 1800-1840*, Pennsylvania Historical and Museum Commission, Harrisburg, 1955. は、戦後さかんになった地方史研究の一環として、一八〇〇年から四〇年までのペンシルヴェニア州における工業労働者の実態を叙述的に描き出す一方、この時代に関する歴史家の重要な論争点「労働者がジャクソンを支持したか」という疑問に対し、ペンシルヴェニアのケース・スタディから回答を出している。

サリヴァンが一八〇〇—一八四〇年を多くに選んだ理由は、この時代設定がアメリカにおける工業労働者の発生を

研究する上に「都合のよい単位」であるからであつた。十九世紀の初頭にはまだ労働者という言葉がほとんどいかなる紙上にもあらわれていなかったが、三〇年代に入ると労働者がアメリカ社会の一つの新しい構成単位として登場して来た。この時期がアメリカにおける産業革命の発展期と一致することは、云うまでもないであろう。

この時代のペンシルヴェニアにおける工業労働者を研究するに当って、サリヴァンが中心にすえた課題は、「産業革命がペンシルヴェニアの賃銀労働者に与えたインパクト、およびそれに対する彼らの反応」(iv)であり、具体的には「産業革命の進展に大きな貢献をした賃銀労働者が、そこから正当なる利益をうけたか否か」(二七頁)を研究するにあつた。この課題に答えるために、第一章では当時のペンシルヴェニアにおける工業立地条件、第二、三章で当時の賃銀労働者とは誰かという疑問にこたえ、第四、五章では労働組合の構成、更に第六、七章で熟練および非熟練労働者別の労働争議の実態をえがいている。

サリヴァンは賃銀労働者を次の四つのカテゴリーに分け各賃銀労働者が産業革命からどのようなインパクトをうけたかを示したかを示したかを分析している。

第一のグループは綿工業を中心とした工場労働者で、この時代に産業革命の影響を直接にうけたのは、このグルー

プだけに限られていた。彼らは機械の導入、工場制度の発

達によって以前にもましてきびしい労働規制(労働時間、労働条件など)をうけ、しかも賃銀はこの時代を通じて物価に対し平行線かまたは下降する傾向にあつた。しかし彼らの不満はまだ散発的で、十分に組織されず、将来、工場労働者が労働運動の担い手となる単なる発芽をこの時代に見出しうるにすぎない。第二のグループとして、第一のグループの工場労働者が都市を中心として発達したのに対し、地方を中心として発達した鉄工業の賃銀労働者(いもの師、鍵、こてなどの製造者や鉄鉞採掘夫、選別鉞夫など)が挙げられる。当時においてはまだ、鉄工業の部門にまで産業革命による技術改革の波が及ばず、彼らは工業労働者というよりも中世的農奴に近く、その多くはピオネジ(借金返済のための半奴隷制)の下に規制されていた。鉄工業の賃銀労働者は、都市から離れて孤立した社会を形成し、しかも雇傭主との契約が全く個人的なものであつたために、彼らの不満のはけ口は全くとぎされ、労働運動の最も遅れた部門であつた。第三には、一般労働者として、道路、運河、炭坑に働く賃銀労働者や、日雇労働者の一団がある。彼らは人数の上でも組織をつくるには余りにも小規模すぎ、賃上げ、労働時間の短縮の要求などを全く個別的に掲げて争つたにすぎなかつた。第四のグループ、熟練技術者が当時

の労働運動の主な担い手であつた。熟練技術者のトップは大工と靴屋で、そのほか印刷工、洋服製縫工、煉瓦工、製帽工などがこのグループに属する。この熟練技術者には、当時においてはまだ直接に産業革命の技術上の改革や工場制工業の導入による影響が及んでいなかった。しかし市場の拡大によって、雇傭主と職人との関係に急速な変化がおこると同時に、註文品の製造にたづさわつてきた従来の雇傭者と、老大な資本と市場をもち既成品を大量に生産する新しいタイプの雇傭者との間にも新しい対立が生じつゝあつた。

〔靴屋たちが不平を云うところによれば〕自己資本あるいは共同資本をもつた東部のずる賢い連中がこの町にやってくる、われわれと同じ仕事をやり始め、賃下げ、大量生産でもって市場で安売りし、それによって大儲けをしている。一方では小売りのために多くの時間をさき、小売りによる利益をまもつてきた連中は、彼らの仕事を放棄するか、または主として破産から己れを救うために工場を始めるほかなかつた(八二頁)。

アメリカの初期の労働運動は、大資本の導入と市場の拡大によって、当時もつとも高い賃銀をえていた熟練工が、単なる労働者の地位に転落するのを恐れた、いわば反資本主義的の目的から始められた。しかも、アメリカの賃銀労働

働者階級すべてに共通する現象として、社会が流動的で固定化しないために、彼らの性格を曖昧にし、かつ彼らの運動を不徹底なものにした。

第二の設問「労働者がジャクソンを支持したか」という疑問に対し、サリヴァンはペンシルヴェニアの場合、はっきりと「ノー」という解答を出している。(第八章)それを立証する方法として、(1)労働者の代弁者であることを表明していた当時の唯一の機構、労働者党がジャクソン派の候補者を支持していたか、(2)賃銀労働者の多い地域(厳密には地区平均の所得の低い地域)がこの時期にジャクソン派を支持していたか、という二点からの考察がなされている。労働者党は一八二八年から三一年にかけてペンシルヴェニア各地に生まれたが、サリヴァンが二つの都市(フィラデルフィアとピッツバーグ)と二つの郡をしらべた結果、フィラデルフィアを除き労働者党は、ただ名前を労働者から借りただけで、実際には労働者の政党ではなかつた。またどの場合も労働者党がジャクソン派を支持したという証拠は全くなくて、その中の多くは逆に反ジャクソン派(例えば反メイソン党)と結びついていた。

第二点の証明としてサリヴァンは、先きにR・T・パウアーが採用したと同じ方法を用いて、地区を平均一人当りの財産査定額の少ない順に並べ、大統領選挙(一八二八—

四〇年)、知事選挙(一八三二—一八三八年)において、民主党の得票率がどう変動したか(パウアーと同じく投票数の絶対数を問題にするのではなく、前年比の相対的変動率を問題にしている)を調べた。その結果、サリヴァンは、賃銀労働者の多い地区がホイッグ党に対し終始一貫した支持を与えていた(相関関係を求め、それを二倍した数字によってこれを証明した)として、パウアーとは全く異った結論を導き出した。しかも、シュレジンガー・ジュニアによれば、ジャクソンと労働者とは結びついていたのは、一九三二年の銀行戦以後だといっているが、サリヴァンはジャクソンと労働者が結びついていたのは一八二四年から二六年までであって、銀行戦の時までにはすでにその結合力が弱まってきている、と結論づけた。

以上がサリヴァンの本の簡単な紹介であるが、同書はペンシルヴェニアの工業労働者の実態研究と「労働者がジャクソンを支持したか」という二つの視点から追求しながら両者の間にほとんど理論的結びつきがないことがおしまれる。強いてその関連を見出すとすれば、一八三〇年代に入ってから新しく社会の一つの構成単位として登場してきた工業労働者は、それ自身としてまだ統一ある行動をとるほどの力をもたなかったが、サリヴァンが指摘しているように、当時の党に所属するものであれ政治家をめざす者は、彼

らが労働者の味方であるということを表示せずには政界に登場できなかった(一五九—一六〇頁)ために、ジャクソン派もポーズとして労働者の代表ということをうたわざるを得なかった。しかし実際にはまだ自らの経済的利害を政治の上に反映する力を十分にもたなかった労働者は、どの政党にもゆれ動く可能性を備えていた時代だといえよう。この本は、第七章までのペンシルヴェニアにおける工業の発達と賃銀労働者の実態をのべた部分は、一地方の政治経済史としてわれわれの今後の研究に大きく役立つであろう。しかし後半の「労働者がジャクソンを支持したか」という疑問の出し方自体が、その答がどのようであれ、ジャクソン時代を説明するのに十分な設問ではないように思われる。またサリヴァンの本の中には、労働者、工業労働者、賃銀労働者、工場労働者など多くの言葉が登場し、その使いわけの曖昧さが、この時代の労働者層をとらえる上での弱点になってはいないだろうか。しかし紹介者は、サリヴァンの言葉を出来るだけ忠実にそのまま使用したつもりである。

#### まとめ

一九六三年までのアメリカにおけるジャクソンニアン・デ

モクラシーの研究史をたどってきて、さらに現在における反省をも加えて、つぎのような問題点を指摘できよう。

1、これまでみてきたジャクソンニアン・デモクラシーについてのいくつかの仮説は、いずれもそれを提起した人びとが、自らがおかれた時代の現実とそこにおける自らの実践的立場を、意識的ないし無意識的に、ジャクソン時代に(あるいはひろくアメリカ史全体に)投影し、ジャクソンニアンズを自らの姿に、あるいは自らのあるべき姿になぞらえて描きだしている、とみられる。たとえば、ターナーが西部農民を、ビアードが「独占」に反対する革新主義者を、シュレジンガーが実業界に挑戦する労働者を指導する自由主義的改革者(ニューディーラー)を、ホーフスタッターやハモンドが「人民資本主義」社会の小実業家ないし「興起しつつある中産階級」を、ハーツやメイヤーズが一九五〇年代の逆説的人間像ないし中産階級を、というように。したがって、ジャクソン期研究の史学的検討は、彼ら研究者が当 faced した現実と、そこにおける彼らの実践的立場の内在的な検討をふまえなければ、いいかえれば現代アメリカの思想史をふまえなければ、十分とはいえないのである。この意味でも、この共同研究は未完である。

2、一九六二年段階でのジャクソン期研究は、従来の仮説を統計的分析によってテストする方法と、人間の行動を

経済的・社会的条件(客観的条件)からだけではなく、むしろ宗教的・民族的・心理的条件などの複合する意識の面(主体的条件)に重きをおいてとらえる方法とを、結び合わせようとする方向にあったと思われる。ヒュージンズやベンソンの研究は、その試みである。このような傾向は、現在まで続いていると思われる。

3、これまでのいずれの研究にも共通していることは、研究対象をほとんどコモン・マンあるいは白人社会にのみ限定し、しかも、そのなかで上昇する部分にのみ視野を限定して、下降する部分ないしは新来の移民と特権的「独占」に「眼を開かず」とりわけ、まさにこのジャクソン期に再強化される黒人奴隷制と、新たに公然と連邦権力によって強行されるインディアンの強制移住との関連については、全くといってよいほど「眼を開いていない」ことである。またこれに関連して、当時の主要な問題として銀行戦にのみ関心を集中して、逆に西部の土地政策ないし膨張政策などへの関心が欠落していることが指摘できよう。この点では、一九六〇年代には、ある程度の変化がみられ、新しい研究があらわれている。

4、地域別・個別研究や、さまざまな要因の分析が必要であることはいうまでもないが、「分析された事実を意味づける仮説」が不可欠であることは、ウォードの指摘を待つ

まてむなく。(John W. Ward, "The Age of the Common Man," in John Higham, ed., *The Reconstruction of American History*, 1962. pp. 96-97)問題は、これまでみてきたように、立てらるべき仮説そのものが歴史的なものであることを認識するかどうかにある。今日のわれわれにとつて立てられるべき仮説は、少なくとも3、にのべたような不当に無視された部分——下降部分、新移民、特権的「独占」体はもとより、黒人奴隷とインディアン——をつつみこむものでなければならぬであろう。

(一九七二年十二月)

お知らせ

後述の大会記事(頁一七三)にありますように、大学当局の大会費打切りの措置に対して、本史学会は、大会の総意にもとづいて、立教大学日本文学会、同英米文学会とともに当局に対しつぎの要請書を提出しました。

要請書

第28回部長会(十一月十五日)で決定したという「学会の登録と開催に関する件の申し合わせ事項」は、学会当事者になんらの相談も無く、決めたものである。このような一方的な決定は甚だ遺憾である。大学当局は改めて、会長等学会当事者と相談の上、研究・教育活動育成の方向に向って納得のゆく措置をすみやかにとるよう、ここに要請する。

一九七二年十一月二十九日

立教大学史学会会長	井上幸治
立教大学日本文学会会長	宇野義方
立教英米文学会会長	鳴海弘
立教大学部長会 殿	